

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 5 月 5 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K03281

研究課題名(和文) 越境する人類学：インド洋西部地域におけるアラブ移民ハドラーミーのネットワーク形成

研究課題名(英文) The Anthropology across the Borders: The Formation of Hadhrami Network in the Western Indian Ocean World

研究代表者

朝田 郁 (ASADA, Akira)

京都大学・アフリカ地域研究資料センター・特任助教

研究者番号：00780420

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では現代のインド洋西部地域を対象に、ハドラーミーと呼ばれるアラブ移民による越境活動の背景を解明した。まず、移民ネットワークが網の目のような構造を取っており、人々の移動も多方向的であることを明らかにした。次に移民コミュニティについて、ハドラーミーとしてのエスニシティと同郷意識が混在した形で、移民社会が立ち上がっていることを見出した。また宗教的な価値観について、旧ホスト社会では世界的なイスラーム復興現象の影響が観察されるものの、新ホスト社会においてはその動きが兆候に留まることを明らかにした。さらに母語としてのアラビア語には、移民コミュニティにとって統合と分断の相反する側面があることを解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、ハドラーミー移民と同様、学問分野を「越境する」研究である。インド洋におけるハドラーミーの移住活動を把握するには、ネットワークの両端を追う必要がある。しかし、この問題意識を持つ研究は限られ、イエメンを中心に東南アジアに触れたレベルに留まる。本研究では、インド洋西部地域を連続的に扱うことで、アラブを対象にしながらも中東とアフリカに分断されていた地域研究を統合した。そして、新旧ホスト国間のネットワーク形成に対する多角的な検討を通して、枠組みの提唱に留まっていた移民のディアスポラについて、今日的な姿を描き出した。その成果は、インド洋海域世界における人々の動態について、研究上の道を拓いたといえる。

研究成果の概要(英文)：This study clarified the background of cross-border activities by Arab immigrants, known as hadhramis, in the Western Indian Ocean World in the present day. First, it was revealed that the immigrant network has a meshed structure and that the movement of people is also multidirectional. Next, I elucidated that immigrant communities are formed through a mixture of ethnicity as hadhrami and a sense of shared homeland. The study also revealed that while the impact of the global Islamic revival can be observed in the old host societies, there are only faint signs of this movement in the new host societies. Furthermore, I have found that Arabic as a native language has both integrating and divisive aspects for immigrant communities.

研究分野：イスラーム地域研究

キーワード：ハドラーミー ザンジバル アラブ首長国連邦 移民 ネットワーク エスニシティ 母語 イスラーム復興運動

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

インド洋に面した国々の港湾都市では、ハドラーミーと呼ばれる移民の姿を見ることができる。彼らはアラビア半島南部に位置するイエメン・ハドラーマウト地方出身のアラブで、紀元前後の時代から、インド洋を舞台にした海上交易の担い手であった。また近代以降は、インド洋周辺部の各地域に対して積極的かつ継続的な移住活動をおこなっており、定住先であるホスト社会のイスラーム化を進める要因にもなった〔家島 1993〕。ハドラーミー移民のコミュニティは、インド洋世界の各地に点在しており、現在も国境を越えて相互にネットワークを維持している。

彼らの人的・経済的なつながりは、「ハドラーミー・ネットワーク」と呼ばれ、それ自体が一つの研究ジャンルとなっている〔Freitag & Clarence-Smith 1997〕。しかし、その研究成果は東南アジアなどインド洋東部地域に集中し、対象となる時代も第二次世界大戦期までに留まる。これは当地の史料が多いことと、移住が大戦期に終結したと考えられていたことに拠っている。一方、研究代表者はこれまでの東アフリカにおける隣地調査を通じて、インド洋西部地域では通説に反し、彼らの移住活動が 20 世紀後半まで継続したことを確認している〔朝田 2017〕。

さらに 21 世紀に入ると、ハドラーミー移民側にも新しい動きが生じている。一旦は東アフリカ沿岸部に定着した移民とその子孫が、アラビア半島の湾岸産油国に再移住を始めているのである。インド洋周辺部を目指す移住活動が途絶えて、すでに数十年が経過した現在、彼らの越境にはそれを支える別の論理が働いていると考えられる。そこでハドラーミー・ネットワークの動態をとらえるため、今日的な視点での取り組みが必要である。

2. 研究の目的

以上の背景から、本研究はインド洋西部地域を舞台とした、現代的な視点によるハドラーミー・ネットワーク形成の多元的理解を目指す。東アフリカ沿岸部からの再移住者の動きは、かつてのインド洋周辺部へ向かう拡散型の移住に対して、逆方向かつ集中型の流れであり、ペルシャ湾岸産油国が彼らのネットワーク上の新たなハブになっているとみられる。そこで、この仮説に基づいて、湾岸産油国と東アフリカにおける越境的ネットワークの実態を解明する。

本研究では、ハドラーミー・ネットワークを線と点に分けて検討を進める。移民の送り出し元である東アフリカ諸国と受入先である湾岸産油国は、それぞれ移民ネットワークの両端の点であり、地域間のつながりは線にあたる。そこで線的な視点では、何がハドラーミーの越境を実現させているのか、そのファクターの解明を課題とする。研究にあたっては、移住から定着までの過程における彼らのエスニシティの役割と、移民コミュニティを相互に結び付けている血縁・親族ネットワークを検討する。また点的な視点では、各ホスト社会に注目することで、移民と彼らを取り巻く人々の関係性の解明を課題とする。彼らは、再移住の前後いずれの社会においても異邦人である。東アフリカ先住者にとって、ハドラーミーは中東の「アラブ」である。一方、湾岸産油国民にとって、ハドラーミーの再移住者は民族は同じアラブでも、異なる生活習慣を帯びた「アフリカ人」である。そこで、移民と新旧ホスト社会の住民たちがどのような相互関係を築いているのか、両者が共有する言語とイスラーム的価値観から考察する。

3. 研究の方法

移民越境のファクターに関する課題では、現在、再移住を行なっている移民と、彼らを受け入れたコミュニティの構成員から、移住先の選択、移民の受け入れ、社会生活の開始について、ライフ・ストーリーの聞き取りをおこなう。そして、ハドラーミーとしてのエスニシティが、これらの移住活動の各段階において、どのように機能してきたのかを解明する。

ホスト社会との関係性をめぐる課題では、言語とイスラーム的な規範が共同体形成に果たしている役割を調査する。移民たちが暮している東アフリカ沿岸部の都市と湾岸産油国の両方がイスラームを基調とした社会である。また、東アフリカ出身のハドラーミー移民は、アラビア語とアフリカ系の言語であるスワヒリ語の多言語話者でもある。そこで、移民と彼らを取り巻くホスト社会の人々におけるコミュニケーションのあり方と、宗教活動への参与観察を通して、言語とイスラーム実践が両者の関係をどう取り結んでいるのかを検討する。

4. 研究成果

本研究の成果は、ハドラーミー・ネットワークの形態、移民コミュニティの成り立ち、ホスト社会と共有されたイスラーム的な価値観、母語としてのアラビア語の4側面に集約される。

(1) 移民ネットワークの形態

移民ネットワークの形態について、本研究では、「ハドラーミー移民による移住活動が、20世紀のインド洋周辺部への拡散から、21世紀に入るとインド洋世界各地から湾岸産油国へ集中する方向性に反転した」という仮説を立てていた。しかし、東アフリカ（タンザニア）と湾岸産油国（アラブ首長国連邦）の両方で調査を進める中で、ハドラーミー移民たちの移住の方向性は、当初描いたような拡散と集中の単純なモデル化とは異なって、網の目のようなネットワークを形作っており、その上を人々が多方向的に行き交っていることが明らかになった。東アフリカから湾岸産油国に再移住した大きな理由は、前者がイギリスの保護領から独立したことにとともなう政治・経済的な混乱と、後者に大規模な油田が発見されたことによる経済発展があった。しかしながら、再移住の動きは一方向ではなく、湾岸産油国に定着した後であっても繰り返し東アフリカに戻る移民が少なくなかった。また、これまで湾岸産油国が再移住の有力な目的地ではあったものの、移住先としてアメリカやヨーロッパ、東南アジアなどが選ばれるケースも出ており、移民を取り巻く状況変化の激しさは予想を超えるものであった。

(2) コミュニティの成り立ち

コミュニティの成り立ちについては、ハドラーミーとしてのエスニシティと、出身地を同じくするという意識が混在した形で移民社会が立ち上がっていることが明らかになった。ハドラーミー移民の移住先の選択には一定の傾向があり、目的地の選定はランダムではなく、そこに暮らす「人」を重視する姿勢がうかがえた。しかしながら、移住先はハドラーミーの先行移民が暮らしている場所という基本条件がありつつも、ホスト社会に成立したコミュニティは、必ずしもハドラーミーだけで構成されてはいなかった。調査を実施したアラブ首長国連邦は、外国人労働者が人口の9割前後を占める国家であり、その圧倒的多数は南アジアと東南アジアの出身者である。その社会において、東アフリカから再移住したハドラーミーは、マイノリティ中のマイノリティに過ぎない。そこで、旧ホスト社会である東アフリカにおいて同郷であったことが、新たなホスト社会では、移住者間の強力な紐帯となっており、ハドラーミー、オマーン系、アフリカ系、そしてインド系の移民が、同じコミュニティを形作っている様子が観察された。また旧ホスト社会である東アフリカでは民族協会が設立され、現在もハドラーミー移民のエスニシティ維持に努めているが、新ホスト社会である湾岸産油国においては、同様の組織が存在していた形跡は認められるものの、すでに役割を終えて活動を停止したという証言も得られた。

(3) イスラーム的な価値観

イスラーム的な価値観については、ホスト社会の新旧によって共有のレベルが相当に異なることが明らかになった。旧ホスト社会である東アフリカにおいては、ハドラーミー移民が現地に導入したスーフィー教団の活動をコアにして、先住者や異なるエスニシティを持った移民集団との結び付きが強化されている様子が観察された。特に近年は、パブリックスペースにおける宗教儀礼の実践に対する制限が大幅に緩和され、それと共にスーフィー教団や民間医療を始めとするイスラーム的な価値観の復権が進んでいる。これは世界的なイスラーム復興現象と連動したものだとして理解され得るが、その中心にあるのが、預言者ムハンマドの子孫が創始したアラウィーと呼ばれるスーフィー教団であり、その中心的な担い手がハドラーミー移民となっている。ところが、新しい移住先である湾岸産油国においては、イスラーム的な価値観が移民とホスト社会の住民との統合を進めている様子はほとんど見られなかった。その大きな理由として考えられるのは、現地で施行されているイスラーム法の違いである。ハドラーミー移民はスンナ派シャーフィイー学派を信奉しているが、研究代表者が調査したドバイとアブダビは、マーリク学派が中心であり、アジュマーンはハンバル学派に従っている。また、スーフィー教団の活動も、移民の家庭内での実践に留まっていた。一方で、イスラーム的な価値観に基づいた民間医療については、ドバイ、アブダビ、アジュマーンの各首長国で観察された。したがって、イスラーム復興の推移によっては、今後、宗教実践が人々の紐帯となる可能性も残されている。

(4) 母語としてのアラビア語

母語としてのアラビア語については、移民コミュニティにとって統合と分断の両側面があることが明らかになった。歴史の浅い湾岸産油国において、東アフリカ出身のハドラー移民はオールドカマーに位置付けられるが、現在のイエメンから直接、湾岸産油国に移住したニューカマーも存在する。彼らもハドラーとしてのエスニシティを持っているが、東アフリカ出身のハドラー移民とは没交渉的であり、それぞれ別の移民コミュニティを形作っている。その理由は言語習慣にある。湾岸産油国における生活言語は、非アラブに対する英語使用を除けばアラビア語の湾岸方言であり、ニューカマーの母語はアラビア語のイエメン方言である。一方、東アフリカ出身のオールドカマーの母語はスワヒリ語であり、湾岸産油国での生活に合わせてアラビア語の湾岸方言も話すようになっている。また移民の子世代以降の母語は、完全に湾岸方言に置き換わっている。オールドカマーの移民家族において、スワヒリ語の理解は同郷者との紐帯として機能しており、異民族を含めた移民コミュニティの統合に役立っている。一方で、母語や理解できるアラビア語の性質の違いから、同じハドラーでありながら新旧ハドラー移民は相互に交わらず、コミュニティに分断が生じている様子が観察された。

引用文献

- 朝田 郁『海をわたるアラブ：東アフリカ・ザンジバルを目指したハドラー移民の旅（京都大学アフリカ研究シリーズ 17）』、松香堂書店、2017.
- 家島彦一『海が創る文明：インド洋海域世界の歴史』、朝日新聞社、1993.
- Freitag, U. & Clarence-Smith, W., *Hadhrami Traders, Scholars and Statesmen in the Indian Ocean, 1750s-1960s*, Brill, 1997.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 7件）

1. 著者名 朝田 郁	4. 巻 -
2. 論文標題 ザンジバル革命を見るまなざし：アラブ移民ハドラマーの経験から（要旨）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本アフリカ学会第58回学術大会研究発表要旨集	6. 最初と最後の頁 21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Akira Asada	4. 巻 -
2. 論文標題 Contemporary Sufism: Tariqa 'Alawiyya in Zanzibar, Tanzania	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 USBIK 2020: 3rd International Social Sciences Congress	6. 最初と最後の頁 720-729
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/268704	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Akira Asada	4. 巻 -
2. 論文標題 Contemporary Sufism: Tariqa 'Alawiyya in Zanzibar, Tanzania (Abstract)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 USBIK 2020: 3rd International Social Sciences Congress (Abstracts)	6. 最初と最後の頁 112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 朝田 郁	4. 巻 -
2. 論文標題 スーフィー教団の現在：東アフリカ・ザンジバルにおけるタリーカ・アラウィーヤ（要旨）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本アフリカ学会第56回学術大会研究発表要旨集	6. 最初と最後の頁 146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Akira Asada	4. 巻 -
2. 論文標題 Journeys of Hadhrami Arabs Headed for Zanzibar (Abstract)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 USBIK 2019: 2nd International Social Sciences Congress (Abstracts)	6. 最初と最後の頁 259
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akira Asada	4. 巻 -
2. 論文標題 Folk Islam in Contemporary East Africa	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 USBIK 2018: 1st International Social Sciences Congress	6. 最初と最後の頁 1525-1544
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/265082	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Akira Asada	4. 巻 -
2. 論文標題 Folk Islam in Contemporary East Africa (Abstract)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 USBIK 2018: 1st International Social Sciences Congress (Abstracts)	6. 最初と最後の頁 256
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 朝田 郁	4. 巻 -
2. 論文標題 ハドラーミ移民の生きる世界：インド洋西海域を旅したアラブの軌跡 (要旨)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 日本中東学会第33回年次大会研究発表要旨集	6. 最初と最後の頁 39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 朝田 郁
2. 発表標題 ザンジバル革命を見るまなざし：アラブ移民ハドラマミーの経験から
3. 学会等名 日本アフリカ学会第58回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Akira Asada
2. 発表標題 Contemporary Sufism: Tariqa 'Alawiyya in Zanzibar, Tanzania
3. 学会等名 USBK 2020: 3rd International Social Sciences Congress (Kayseri, Turkey) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 朝田 郁
2. 発表標題 スーフィー教団の現在：東アフリカ・ザンジバルにおけるタリーカ・アラウィーヤ
3. 学会等名 日本アフリカ学会第56回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akira Asada
2. 発表標題 Journeys of Hadhrami Arabs Headed for Zanzibar
3. 学会等名 USBK 2019: 2nd International Social Sciences Congress (Nevsehir, Turkey) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Akira Asada
2. 発表標題 Folk Islam in Contemporary East Africa
3. 学会等名 USBK 2018: 1st International Social Sciences Congress (Kayseri, Turkey) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 朝田 郁
2. 発表標題 ハドラーミ移民の生きる世界：インド洋西海域を旅したアラブの軌跡
3. 学会等名 日本中東学会第33回年次大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 【編集委員長】八木久美子【編集委員】阿部尚史・久志本裕子・澤井充生・澤江史子・山根聡・苅谷康太・鎌田由美子・後藤絵美・島田志津夫・深見奈緒子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 768
3. 書名 イスラーム文化事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------